

「ひとりにしない」という支援 重層的支援体制整備事業 「伴走型支援の考え方」について 2021年国研修

NPO法人 抱樸

NPO法人 ホームレス支援全国ネットワーク

一般社団法人 生活困窮者自立支援全国ネットワーク

一般社団法人 全国居住支援法人協議会

公益財団法人 共生地域創造財団

一般社団法人 日本伴走型支援協会

一般社団法人 日常生活支援住居施設全国協議会

東八幡キリスト教会

代表 奥田知志



伴走型支援とは

「つながり続けることを

目指すアプローチ」

(厚労省)

これからの支援の両輪

①課題の解決が目的

👉 課題解決型支援

②つながり続けることが目的

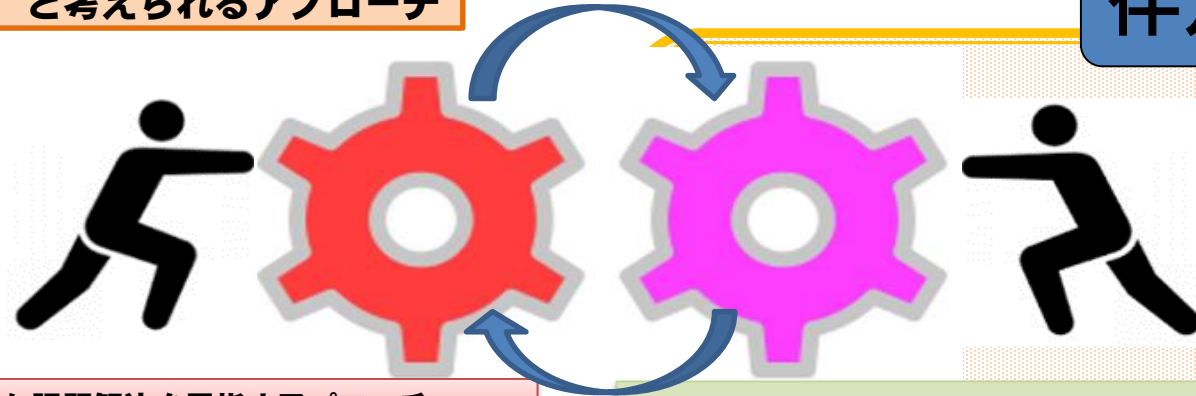
👉 伴走型支援

二つの支援の関係

👉 機能であって役割ではない

対人支援において今後求められるアプローチ

支援の“両輪”と考えられるアプローチ



伴走型支援

具体的な課題解決を目指すアプローチ

- 本人が有する特定の課題を解決することを目指す
- それぞれの属性や課題に対応するための支援(現金・現物給付)を重視することが多い
- 本人の抱える課題や必要な対応が明らかな場合には、特に有効

つながり続けることを目指すアプローチ

- 本人と支援者が継続的につながることを目指す
- 暮らし全体と人生の時間軸をとらえ、本人と支援者が継続的につながり関わるための相談支援(手続的給付)を重視
- 生きづらさの背景が明らかでない場合や、8050問題など課題が複合化した場合、ライフステージの変化に応じた柔軟な支援が必要な場合に、特に有効

共通の基盤

本人を中心として、“伴走”する意識

個人が自律的な生活を継続できるよう、本人の意向や取り巻く状況に合わせ、2つのアプローチを組み合わせる必要がある。

厚労省が提唱してきた孤立に着目した伴走型支援が
厚労省の次年度施策に明記された。

厚生労働省令和元年12月
地域共生社会推進検討会議最終まとめ

なぜ伴走型支援が必要に
なったのか

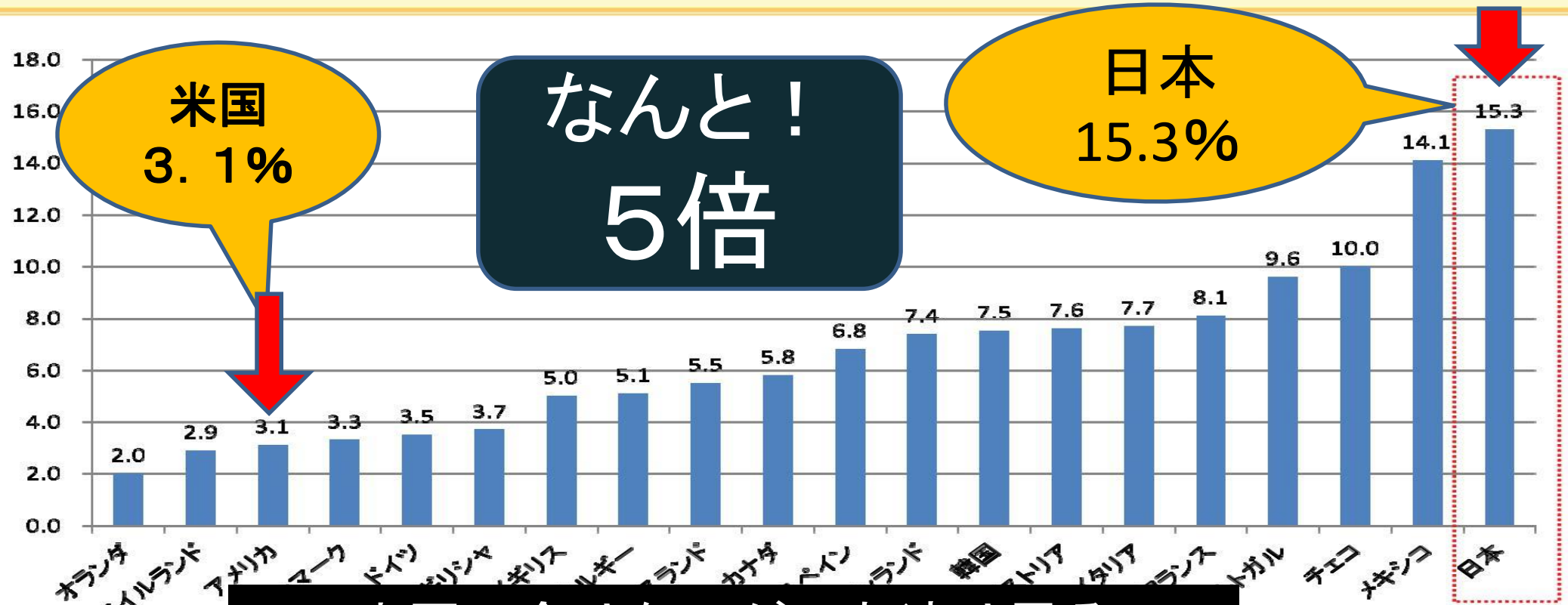
—社会的孤立の現状

社会的孤立の調査 OECD諸国の比較

※相対的貧困率(2012年) 米国17.4% 日本16.1%

「家族以外の人」と交流のない人の割合(国際比較)

○ 日本では「友人、同僚、その他の人」との交流が「全くない」あるいは「ほとんどない」と回答した人の割合が15.3%あり、OECDの加盟国20か国中最も高い割合となっている。

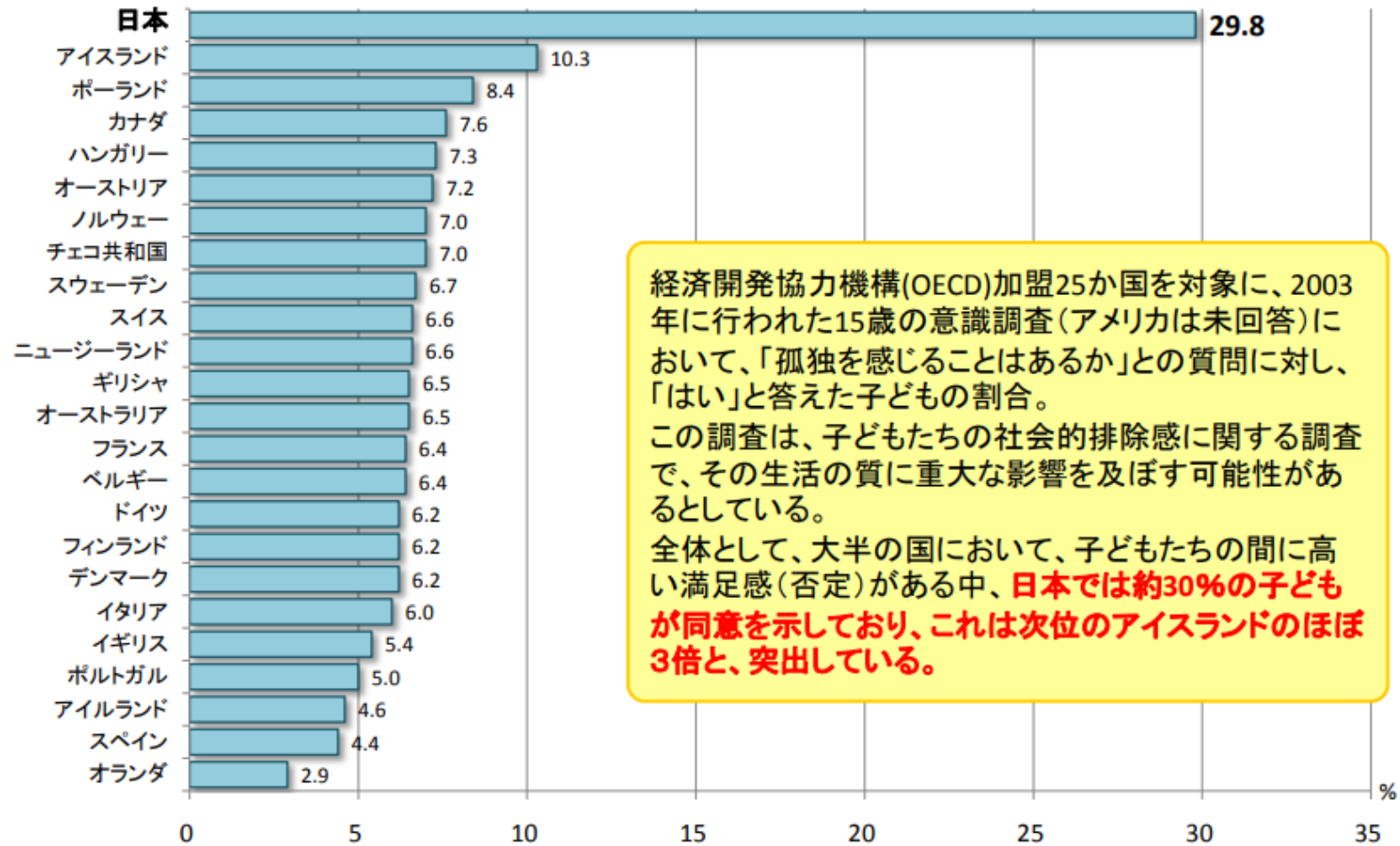


(注)友人、職場の同僚との交流が、「全くない」

米国⇒金はないが、友達はある
日本⇒金もないが、友達もいない

「全くない」あるいは「ほとんどない」と回答した人の割合が15.3%あり、OECDの加盟国20か国中最も高い割合となっている。
Glance:2005 edition,2005,p8

「孤独を感じる」と答えた子どもの割合



経済開発協力機構(OECD)加盟25か国を対象に、2003年に行われた15歳の意識調査(アメリカは未回答)において、「孤独を感じることはあるか」との質問に対し、「はい」と答えた子どもの割合。

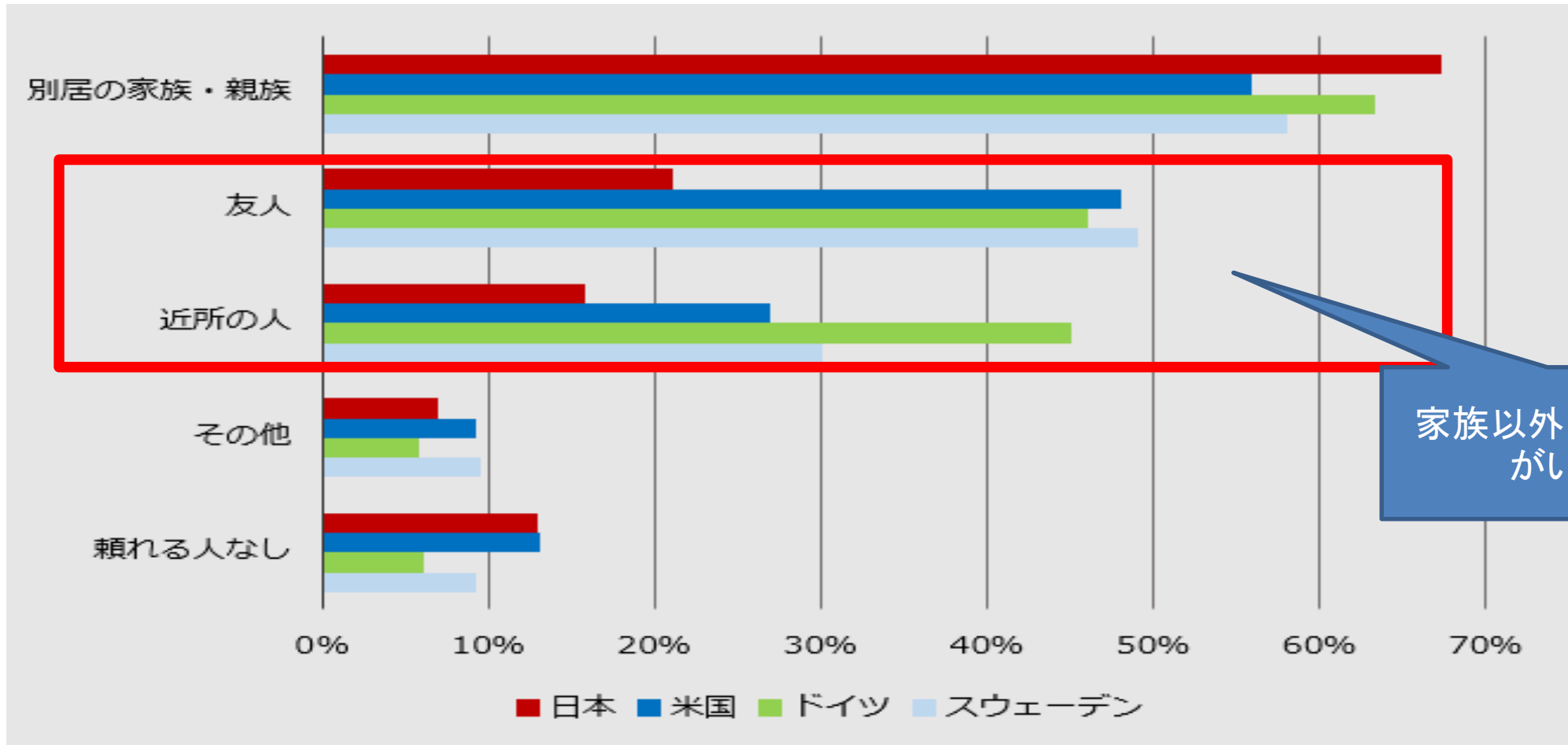
この調査は、子どもたちの社会的排除感に関する調査で、その生活の質に重大な影響を及ぼす可能性があるとしている。

全体として、大半の国において、子どもたちの間に高い満足感(否定)がある中、**日本では約30%の子どもが同意を示しており、これは次位のアイスランドのほぼ3倍と、突出している。**

UNICEF, Child poverty in perspective: An overview of child well-being in rich countries, *Innocenti Report Card 7*, 2007 UNICEF Innocenti Research Centre, Florence.

日本の60歳以上単身者は友人や近所の人に頼れない

—病気などの場合に同居家族以外に頼れる人についての国際比較—



家族以外に頼れる人がいない

(注) 対象は60歳以上の高齢単身者。複数回答

(出所) 内閣府「高齢者の生活と意識—第8回国際比較調査結果報告書」(2016年)を基に藤森克彦氏が作成

地域共生社会の議論から

(「地域共生社会に向けた包括的支援と多様な参加・協働の推進に関する検討会」最終とりまとめ 令和元年 12 月 26 日)

1 地域共生社会の理念とその射程

○日本の社会保障は、他の先進諸国同様に、人生において典型的と考えられるリスクや課題を想定し、その解決を目的として、それぞれ**現金給付**や福祉サービス等を含む**現物給付**を行うという基本的なアプローチの下で、公的な保障の量的な拡大と質的な発展を実現してきた。

日本の社会保障

☞現金給付と現物給付

つながりとケア

☞家族・地域・会社

○その一方で、個人や世帯が抱える**生きづらさやリスクが複雑化・多様化**している。例えば、**社会的孤立など関係性の貧困の社会課題化**、ダブルケアやいわゆる8050問題など複合的な課題や人生を通じて複雑化した課題の顕在化、就職氷河期世代の就職困難など雇用を通じた生活保障の機能低下などの変化が見られている。

☞新しい問題・・・課題の複合化・社会的孤立

☞背景・・・雇用不安定化・家族脆弱・地域崩壊

※社会的孤立の解消・関係の構築＝伴走型支援

■生活困窮者自立支援制度

■重層的支援体制整備事業

共通する視点⇒「社会的孤立」への注目

生活困窮者自立支援法2018年改正

(基本理念)

第二条 生活困窮者に対する自立の支援は、生活困窮者の尊厳の保持を図りつつ、生活困窮者の就労の状況、心身の状況、**地域社会からの孤立の状況**その他の状況に応じて、包括的かつ早期に行われなければならない。

(定義)

第三条 この法律において「生活困窮者」とは、就労の状況、心身の状況、**地域社会との関係性その他の事情**により、現に経済的に困窮し、最低限度の生活を維持することができなくなるおそれのある者をいう。

2018年1月18日英国「孤独問題担当大臣」新設

国家損失年間4.9兆円（320億ポンド）

英国の孤立率 5%（日本15.3%）

◆赤十字社など13の福祉団体連携⇒2017年に約1年間かけて調査実施

※孤独の健康被害⇒肥満・一日に15本喫煙よりも有害

👉英国医療現場『**Social prescribing（社会的処方）**』

『薬』ではなく『社会関係』（の改善策）を処方する・・・医療費20%縮小

■2021年2月日本
「孤独・孤立対策」担当大臣就任



孤立のリスクとは？

①「自分自身からの疎外」

- ☞ 人は、他者を通して自分の状態を知る。
- ☞ 自分とは何か、自分の存在意義、さらに自分の状態さえ正確に認識することが困難となり「自己認知不全」を起こす

②「生きる意欲・働く意欲の低下」

- ☞ 「何のために働くのか」・・・内発的な動機
- ☞ 「誰のために働くのか」・・・外発的な動機
- ☞ 意欲低下は自殺の危険性を高める

③「社会的サポートとつながらない」

- ☞ 良い制度も、知らない、教えてくれる人がいない、つないでくれる人がいないと存在しないと同じ
- ☞ 対処が遅れ問題が深刻化し社会保障のコストも増大する。

伴走型支援の価値

ホームレス支援から見た二つの困窮

※課題解決による自立を孤立に終わらせないために

1) 路上で…「畳の上で死にたい」

2) 自立後…「俺の最期は誰が看取ってくれるか」

👉「何が必要か」 住居、保証人、職、健康保険、携帯、弁護士

👉「誰が必要か」 心配してくれる人、一緒にいてくれる人、感謝してくれる人

3) 二つの困窮

👉 **経済的困窮**(ハウスレス)

👉 **社会的孤立**(ホームレス)

※ **ハウスとホームは違う**

伴走型支援への着想

2000年5月西鉄バスジャック事件

「いじめが原因で中学三年の夏ごろより荒れ始め、まるっきり違う人格のようになり、家庭内暴力になって、何か違う方向へ行く危険性もあり不安でした。

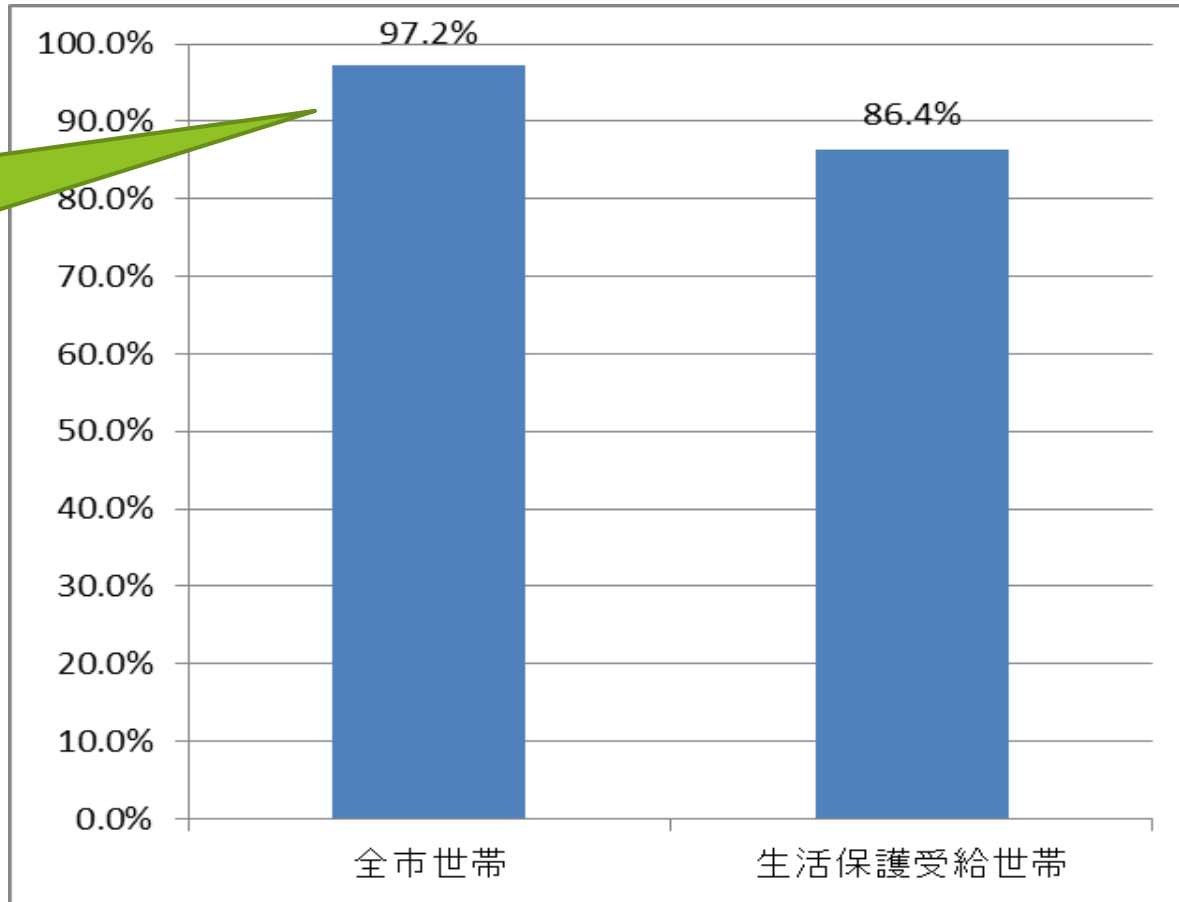
親が気づいても病院の受診がない、診療したことがないからなどと断られる。医師、児童相談所、教育センター、教育相談所など、**いろいろ回りましたが、動いてくださる先生は一人もいらっしやらない**。入院して20日あまり。まじめでおりこうさんを装っているとのこと。何を考えているのか、大きな不安に包まれています。入院当日、「おぼえていろよ、たたではおかないからな」という言葉が忘れられません。心が開けない状態で退院となれば、今まで以上に暴力がひどくなるのではと不安です。心の闇がもっと広がるような気がします。このまま自分を封じ込めた闇の中で一生を終わってほしくありません。しかし、一筋なわでいかない強さももっていて、繊細で、敏感で、私たちの行動を見抜いて動いているようなところもあります。入院先の先生にお任せするしかありませんが、退院後の不安が強すぎて力がわいてこないのです。」

※一緒に動いてくれる人—伴走者・つながりの必要性

二つの貧困の関係

👉 経済的困窮が社会的孤立を招く

全国平均
98.2
%



生活保護世帯の子どもの数・
進学率ー北九州市

出典：北九州市保健福祉局保護課

経済的困窮が結婚できない状況を生み出している

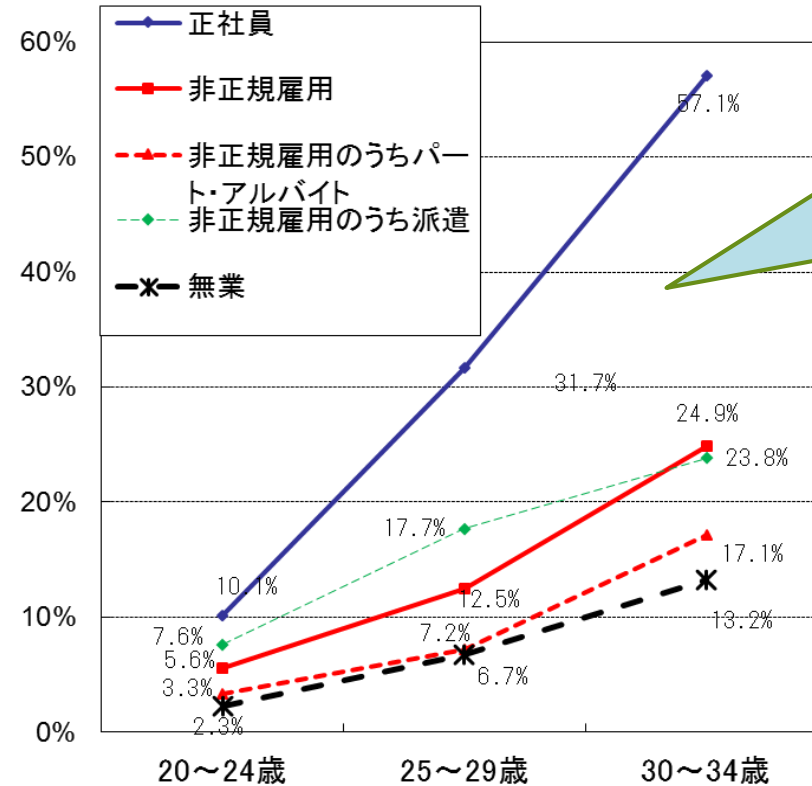
正規雇用と非正規雇用の賃金格差と社会参加

正規雇用と非正規雇用の1人当たり平均給与

	平均給与		
		うち正規	うち非正規
計	408万円	468万円	168万円
男	502万円	521万円	226万円
女	268万円	350万円	144万円

資料：国税庁「民間給与実態統計調査」(2012年)

就労形態別配偶者のいる割合(男性)



男性30歳時点正規雇用既婚率約60%。
非正規雇用既婚率25%半減

資料：労働政策研究・研修機構「若年者の就業状況・キャリア・職業能力開発の現状」(2009年)より作成。

男性の正規雇用と非正規雇用では、年収は半減以下に落ちる

👉 金の切れ目が縁の切れ目

👉 経済的課題の解決は必須

👉 社会的孤立が経済的困窮を招く

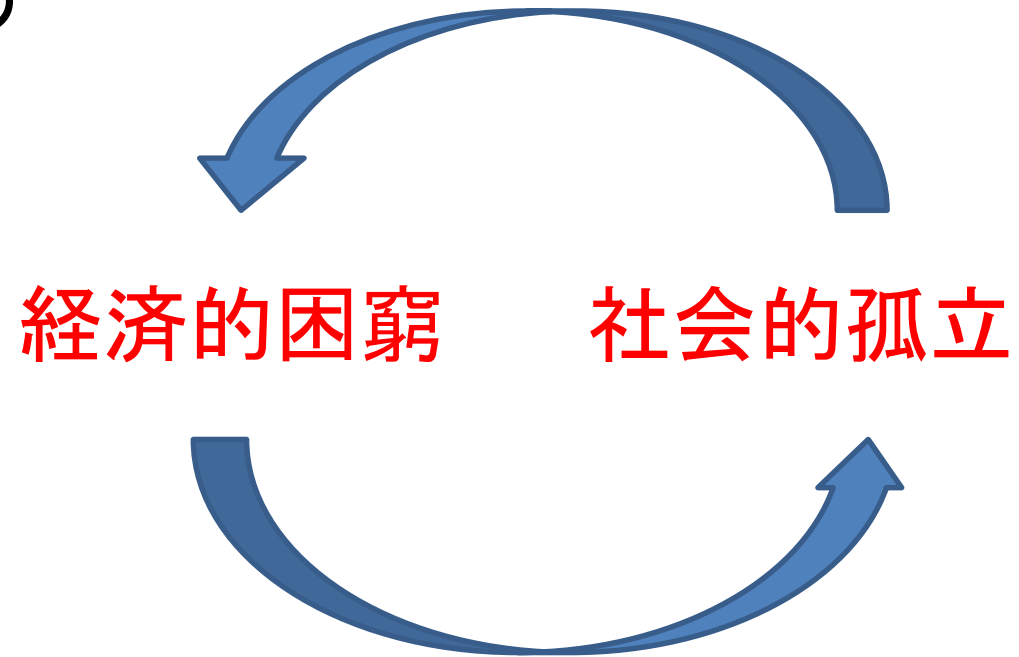
■ 他者の存在が生きる意欲や動機付けとなる

👉 内発的動機・・・自分が諦めたら終わり

👉 外発的動機・・・踏ん張れる理由

■ 野宿11年の西原さんが野宿になった理由

👉 「考えてみたら母ちゃんが出て行ったことかなあ」



※縁の切れ目が金の切れ目

伴走型支援は物語の創造

■物（現金・現物）を物語に変える・・・他者の存在

☞ ホームレスの食事「エサ」・・・残飯「犬猫と一緒に」

☞ しかし炊き出しでもらう物・・・「お弁当」

☞ 食べ「物」でいうと両者はあまり変わらない

☞ しかし、「物」に人が関わることで「物」が「物語」となる

■社会保障とは何か？

☞ 「現金給付」「現物給付」が中心

☞ 自律支援・・・「私の物語創造」

「個人が人格的に自律した存在として主体的にみずからの生き方を追求していくことを可能にするための条件整備」

「人間が生まれて自律的個人へと向かって成長し、不完全ながらも自律性を保持しながら、自らの人生の物語を紡いでいくうえでの条件整備のための制度」

（菊池馨実著『社会福祉再考—<地域>で支える—』岩波新書）

※伴走型支援

物を物語に変える・自律支援

専門職と地域の見守り

伴走型支援における専門職の働き

① 「つながる」

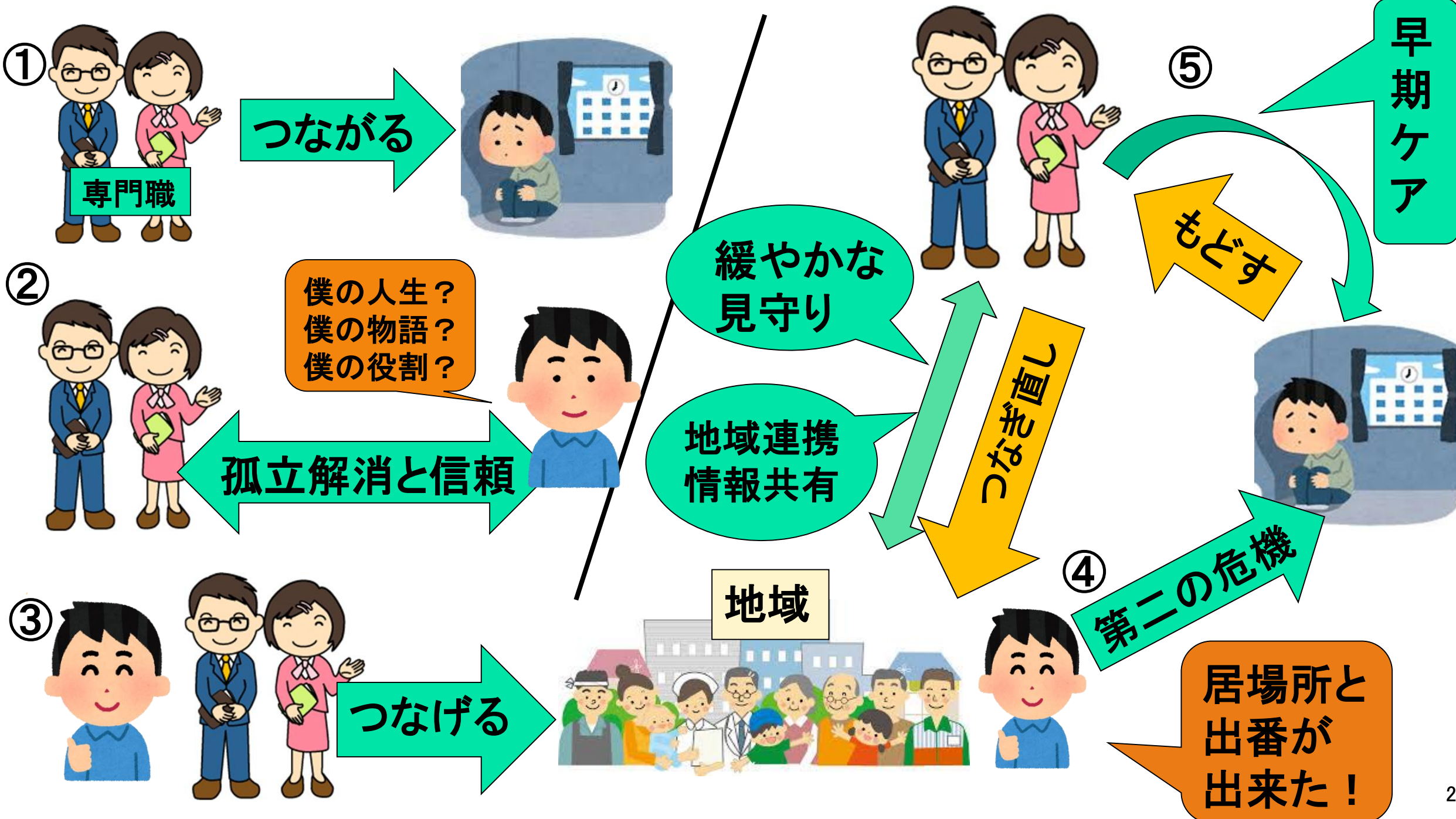
- ☞ 「助けて」と言わない、言えない人へのアプローチ
- ☞ 孤立の壁突破のための知識や技術
- ☞ 信頼の構築のために必要なもの・・・技術と心（伴走の意識）

② 「つなぐ」

- ☞ 「つながり」を抱え込まない
- ☞ 「つなぎ」先の社会資源、地域、キーパーソンの確保と形成
- ☞ 「対個人」と「対社会」

③ 「もどし」と「つなぎ直し」

- ☞ 不安定な社会・・・第二の危機、第三の危機は前提
- ☞ 「つなぎ」後の俯瞰的な「緩やかな見守り」
- ☞ 地域との連携の常態化（情報交換）
- ☞ 本人や「つなぎ」先に問題が生じた時、早期に「もどす」
- ☞ 早期発見・・・予防的対応
- ☞ 本人の意向を元に「つなぎ直す」



○ **多機関協働事業**  **社会資源・各種制度とのつながりを増やす**

実施内容：市町村全体で包括的な支援が行われるよう支援関係機関等の調整機能を果たす

- ・ 複雑化・複合化した事例に対応する支援関係機関の抱える課題の把握や、支援関係機関の役割分担、支援の方向性の整理を行う。
- ・ 支援終了後、支援の主担当となる機関を設定し、本人や世帯に伴走する体制を確保する。

○ **参加支援事業**  **本人とのつながりを増やす**

実施内容：本人の自律に向けて、本人と地域社会とのつながりを作る。

- ・ 個人の自律を叶えるため、柔軟な社会参加の実現に向けた支援を行う。
- ・ 地域社会とのつながり作りに向けて、本人や世帯のニーズや抱える課題などを丁寧に把握、地域の社会資源とのコーディネートやマッチングを行う。
- ・ マッチングした後も、本人の状態や希望にそった支援が実施されているかフォローアップする。

○ **地域づくり事業**  **相互的なつながりを増やすための仕組みづくり**

実施内容：地域の中で、つながり支えあう取組が生まれる環境整備を行う。

- ・ 共同体機能が脆弱化する中、人と人、人と資源がつながり支え合う取組が生まれやすい環境を整える。
- ・ 顔の見える関係性や気にかかけあう関係性が地域で生まれやすくなるよう働きかけていく。

伴走型支援のポイントはつながりの量を増やす

伴走型支援における注意すべき点

①問題解決をおろそかにしてしまう

- ☞ 二つの支援は機能であって役割ではない
- ☞ あくまで支援の両輪であり二者択一ではない

②個人的関係に埋没する

- ☞ チーム支援が原則
- ☞ 抱え込みを防ぐ
- ☞ 伴走する地域(受け皿)の創造が必要
- ☞ 量の確保

③成果がわかりにくい

- ☞ 「つながり」や「孤立」に関する客観的指標がない
- ☞ 特に費用対効果に関する検証が困難。行政の評価困難

④伴走を手段とのみ見なし「つながり」の価値を見出せない

- ☞ つながりそのものがセーフティーネットであることの認識

参考資料

伴走型支援の理念

伴走型支援とは（奥田試案）

伴走型支援は、深刻化する「社会的孤立」に対応するため「つながり続けること」を目的とする支援である。それは「孤立しない社会の創造」を目指す社会活動だと言える。

社会的孤立は、自分自身からの疎外（自己認知不全）、生きる意欲や働く意欲の低下、社会的サポートとつながらない等のリスクを生む。孤立が対処を遅らせることで、問題が深刻化し意欲が一層低下する。そのことで社会保障費の増大をも招く。社会的孤立のリスクは、個人の問題では済まない社会課題となっている。

「つながり」は、「いのち」や「存在」という普遍的価値を土台としている。よって伴走型支援は「生きること」に価値を見出だす。「いのち」が等しく尊いように「つながり」は、対等でなければならない。ゆえに伴走型支援は、「支える側」と「支えられる側」の固定化を乗り越える。

格差や貧困が拡大する中で「課題解決型支援」は不可欠である。ただ、日本社会が抱える困窮が「経済的困窮」のみならず「社会的孤立」であるゆえに「課題解決型支援」と「伴走型支援」は、今後の地域共生社会における「支援の両輪」として実施される。二つは、支援におけるそれぞれの機能を意味しており一体的に行われる。

課題解決型支援がそうであるように伴走型支援は、「本人主体」を尊重する。いずれの支援においても「自分からの疎外」状況にある人が、自ら人生を選び取り、自分の物語を生きることが出来るように「自律支援」を行う。その際、本人の参加が原則となる。そのような「自律」のための環境整備は、「支援の両輪」が目指すところである。「支援の両輪」は、「伴走する意識」によって基礎づけられるゆえに「教え」「指導する」のではなく対話的に実施される。

伴走型支援における専門職は三つの役割を担う。第一に孤立した人と「つながる」ことである。このため知識や技術が必要となる。第二に「つなげる」ことである。「つながり」を抱え込まず、地域や他のキーパーソンへと「つながりを広げる」。伴走型支援における「つながり」は、「開かれたつながり」でなければならない。また、「つなぎ先」に問題がある場合、また本人の同意がない場合には「つなげない」。専門職は、支援者目線のみならず当事者目線を尊重する。第三に「もどし、つなぎ直す」ことである。地域へ「つなげた」後も専門職は「緩やかな見守り」を続ける。再び本人が問題を抱えた場合、あるいは「つなぎ先」に問題が生じた場合、早期に「もどし」、「つなぎ直す」。「つなぎ」と「もどし」は伴走型支援の特徴である。

これまで「つながり」は企業、地域、家族によって担われてきた。しかし、不安定な雇用が増え、結果、家族が脆弱化する中で「つながり」自体が難しくなった。伴走型支援は、脆弱化した家族の機能の回復を目指す。ただし、それを「身内の責任」とするのではなく「家族機能の社会化」として実行する。赤の他人が家族機能を担い合う仕組みを地域に創るため、専門職は「対個人」のみならず「対社会」の働きを担う。

伴走型支援においては「時間」の捉え方も特徴的である。課題解決型支援は、「支援開始から支援終結」という「限られた時間軸」でなされる。「つながり続ける」ことを目指す伴走型支援は、「人生という時間軸」を持つことになる。それゆえ伴走型支援は、「共に生きる日常」を構築するため「ひとりにさせない地域共生社会の創造」へと至る。

伴走型支援の理念 その①

伴走型支援の意味

①伴走型支援は、深刻化する「社会的孤立」に対応するため「つながり続けること」を目的とする支援である。それは「孤立しない社会の創造」を目指す社会活動だと言える。

キーワード

1) 社会的孤立

☞ 日本の孤立率は、先進国第一

2) つながり続けることが目的

☞ つながりは手段ではなく目的

3) 孤立しない社会の創造

☞ あるべき社会とは

☞ 予防的効果

4) 社会活動

☞ 「対個人」であると同時に「対社会」・・・社会創造

伴走型支援の理念 その②

孤立のリスク

②社会的孤立は、自分自身からの疎外（自己認知不全）、生きる意欲や働く意欲の低下、社会的サポートとつながらない等のリスクを生む。孤立が対処を遅らせることで、問題が深刻化し意欲が一層低下する。そのことで社会保障費の増大をも招く。社会的孤立のリスクは、個人の問題では済まない社会課題となっている。

キーワード

1) 自分自身からの疎外

☞ 孤立（他者不在）によって自分の状態や存在意義が解らない

2) 意欲の低下

☞ 動機や意欲は他者との関係の中で生まれる

3) サポートとつながらない

☞ どんなに良い制度であってもつながらないと無いと同じ

4) 対処の遅れ

☞ 事態の深刻化

☞ 社会保障費の増大

伴走型支援の理念 その③

つながりの普遍性と対等性

③「つながり」は、「いのち」や「存在」という普遍的価値を土台としている。よって伴走型支援は「生きること」に価値を見出だす。「いのち」が等しく尊いように「つながり」は、対等でなければならない。ゆえに伴走型支援は、「支える側」と「支えられる側」の固定化を乗り越える。

キーワード

1) 普遍的価値が土台

☞ つながりの土台は「生きているということ事実」

2) つながりの対等性

☞ 支える側と支えられる側を固定化しない

伴走型支援の理念 その④

支援の両輪

④格差や貧困が拡大する中で「課題解決型支援」は不可欠である。ただ、日本社会が抱える困窮が「経済的困窮」のみならず「社会的孤立」であるゆえに「課題解決型支援」と「伴走型支援」は、今後の地域共生社会における「支援の両輪」として実施される。二つは、支援におけるそれぞれの機能を意味しており一体的に行われる。

キーワード

1) 課題解決型支援

☞ 課題解決を目的とした支援

2) 経済的困窮

☞ 解決すべき具体的な課題

☞ 「課題解決型支援」で対応

3) 社会的孤立

☞ 「伴走型支援」で対応

4) 地域共生社会における「支援の両輪」

☞ 課題問題解決型支援と伴走型支援は一体的

5) 二つの支援は、機能であり、一体的に実施

伴走型支援の理念 その⑤

本人主体と自律のための支援

⑤問題解決型支援がそうであるように伴走型支援は、「本人主体」を尊重する。いずれの支援においても「自分からの疎外」状況にある人が、自ら人生を選び取り、自分の物語を生きることが出来るように「自律支援」を行う。その際、本人の参加が原則となる。「本人主体による自律」を応援する環境整備が「支援の両輪」の目指すものである。それは「伴走する意識」によって基礎づけられるゆえに「教え」「指導する」のではなく対話的に実施される。

キーワード

1) 本人主体

☞ 両輪に共通の原則

2) 自律のための支援

☞ 自ら人生を選び、その人がその人として生きる「物語」を支援

☞ 自律のための環境整備

3) 本人の参加が原則

4) 対話的アプローチ

☞ 孤立による自分からの疎外

☞ 対話的(つながり)アプローチの中で本人が自分を発見し選び取る

伴走型支援の理念 その⑥

専門職の三つの働き

⑥伴走型支援における専門職は三つの役割を担う。

第一に孤立した人と「つながる」ことである。このため知識や技術が必要となる。

第二に「つなげる」ことである。「つながり」を抱え込まず、地域や他のキーパーソンへと「つながりを広げる」。伴走型支援における「つながり」は、「開かれたつながり」でなければならない。また、「つなぎ先」に問題がある場合、本人の同意がない場合には「つなげない」。専門職は、支援者目線のみならず当事者目線を尊重する。

第三に「もどし、つなぎ直す」ことである。地域へ「つなげた」後も専門職は「緩やかな見守り」を続ける。再び本人が問題を抱えた場合、あるいは「つなぎ先」に問題が生じた場合、早期に「もどし」、「つなぎ直す」。「つなぎ」と「もどし」は伴走型支援の特徴である。

キーワード

1) つながる

- ☞ 閉ざされた心へのアプローチ
- ☞ 専門知識・技術が必要

2) つなげる

- ☞ 抱え込まない
- ☞ つながりを広げる・・・地域が受け皿
- ☞ つなげない選択

3) もどし・つなぎ直す

- ☞ 緩やかな見守り・地域との連携
- ☞ 第二、第三の危機の早期発見

4) つなぎともどし

伴走型支援の理念 その⑦

家族機能の社会化

⑦これまで「つながり」は企業、地域、家族によって担われてきた。しかし、不安定な雇用が増え、結果、家族が脆弱化する中で「つながり」自体が難しくなった。伴走型支援は、脆弱化した家族の機能の回復を目指す。ただし、それを「身内の責任」とするのではなく「家族機能の社会化」として実行する。赤の他人が家族機能を担い合う仕組みを地域に創るため、専門職は「対個人」のみならず「対社会」の働きを担う。

キーワード

1) これまでのつながり

- ☞ 血縁・地縁・社縁
- ☞ 日本型社会保障

2) つながりの脆弱化

- ☞ 企業と家族の脆弱化によるつながりの劣化
- ☞ にもかかわらず「自己責任」と「身内の責任」の偏重

3) 家族機能の社会化

- ☞ 身内ではない「赤の他人」によるつながりと支え(機能)

伴走型支援の理念 その⑧

人生という時間軸

⑧伴走型支援においては「時間」の捉え方も特徴的である。課題解決型支援は、「支援開始から支援終結」という「限られた時間軸」でなされる。「つながり続ける」ことを目指す伴走型支援は、「人生という時間軸」を持つことになる。それゆえ伴走型支援は、「共に生きる日常」を構築するため「ひとりにさせない地域共生社会の創造」へと至る。

キーワード

1) 課題解決型支援の時間軸

☞ 支援開始から支援終結

2) 伴走型支援の時間軸

☞ つながり続けるゆえに「人生という時間軸」

3) 「共に生きる日常」と「ひとりにさせない地域共生社会」

☞ つながり—日常的事柄

☞ ひとりにさせない地域共生社会の創造